西伊豆健育会病院

症　例　概　要　患者：80歳代女性　特別養護老人ホーム入所中　近隣に次男夫婦居住

病名：腸管出血性大腸菌感染症（病原性大腸菌0157集団食中毒による）

入院期間：令和5年11月中旬～ 12月下旬

入院までの経過：11月上旬より腹痛を伴う軟便・水様便が出現し翌朝から血便が始まった。その後血便量増加、症状が重篤となり当院へ救急搬送され入院となった。病原大腸菌による食中毒によるものだった。

内　　容

血便は一週間ほどで治まり、食事を開始したが食思不振が続き、摂取量が維持できず低栄養状態が続いた。食事内容に関して、看護師、医師、言語聴覚士、栄養士で意見を出し合い、食べやすいゼリー食から始め、3分粥、ステップアップ食へと変更していった。少しでも食事が美味しく食べられるように、食事前後の口腔ケアをしっかり行った。食事介助時は誤嚥に注意し、無理強いしないこととした。

しかし、食欲はなかなか戻らず、11月下旬には5日間、経口摂取ゼロの状況もあり、補液による全身の浮腫と胸水貯留が著明で、危険な状態が続いていた。ご本人から、あまりにも辛い闘病から「もう死にたい。死なせて。だからもう、何も食べなくてもいい。」といった悲痛な訴えが何度も聞かれた。医師・看護師は食事量を把握し、補液が多くなり過ぎないよう話し合った。相談員がご家族に状況を伝えると、「感染対策のPPEを着用して食事介助に参加させて下さい。」との申し出があった。またご本人が終の棲み家と考えていた、信頼関係にある施設の職員もご家族からの情報を得て、食事介助に協力して下さった。

患者さんはご家族や施設職員の顔を見ての安心感からか、徐々に食事摂取量が増し、12月上旬には悲観的な発言の中にも「なんで、こんなになっちゃったのかな。」「ちょっとは食事が美味しくなってきたよ。」と前向きな言葉が聞かれ、表情がとても穏やかになた。また、患者さんの栄養状態が改善すると胸水も減少し、補液、酸素投与治療が終了となった。担当チームの医師は、入院当初からご家族へ丁寧に病状説明を行い、治療経過について、ご理解をいただくことを徹底した。

12月下旬に、在籍していた特別養護老人ホームに退院となった。退院時にご家族は、「皆さんのおかげで食事がとれるようになり、胸の水も減って酸素の値もよくなりました。施設に帰る良いタイミングだと思っています。」と話された。

病原性大腸菌0157による食中毒は、人から人への感染も起こりうる危険な感染症である。当院では総計12名の入院患者を受け入れた。必要な感染対策を取りながら、全ての患者さんが回復に向かうよ

う協力して治療を行った。この患者さんのように、ご家族ならではの力をお借りすることで初めて叶えられるゴールもあることを改めて知った。

今回、集団食中毒により重症となった患者さんが、闘病後の虚脱感、食思不振により生きる意欲が失われた療養生活の中、当院職員と、ご家族、信頼する施設職員も参加しての食事介助により再び食事をとり、生きる意欲が湧いた症例であった。院内のみならず、関係者がOur Teamとなって取り組んだ結果といえる。